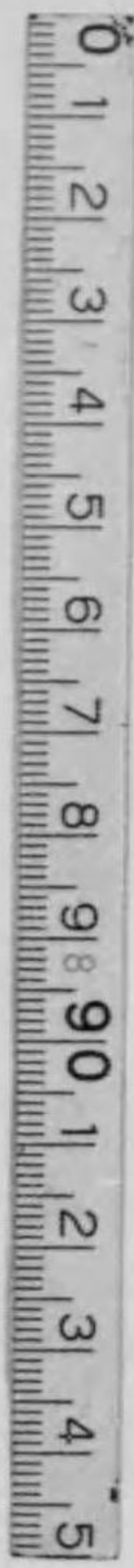


東洋美術總覽

第拾壹輯
第拾貳輯



始



大正十二年十月五日印刷
 大正十二年十月七日發行
 (月刊紙) 京都府京都市中町六番地
 編輯發行者 後藤博山
 印刷者 市川富三
 印刷所 京都市水原區西洞院西入
 市川製版所
 京都市中區院中町六番地
 發行所 平安精華社
 申込料 定額半圓五拾錢

東洋美術總覽

(第拾貳輯)

目次

- (空) 童子像 絹本 着色 寺傳 李紳 (唐代) 人亦一李真トモアリ) 眞素圖中ノ部分也
- (墨) 全體部分原畫ノ大キサ
- (墨) 不容剛像 絹本 原畫ノ大キサ 眞言七祖像七幅中ノ空幅 (國寶) 京都市 教王護國寺藏
- (墨) 李紳(亦一ニ李真) 唐代ノ人其像未ク詳ナラス今茲ニ寺傳ヲ記載
- 東實記ニ曰ク 無畏、金智、不空、真興、一行五祖ノ影像宋大師講來ノ正本也是則李真等所圖二十鋪之隨一也龍猛龍智二祖ノ眞影宋大師於本朝被圖加之弘仁十二年所被圖畫二十六鋪隨一也云々
- (美) 竹雁圖 絹本 着色 王者水筆 (元代) 人 京都 寂光寺藏
- (墨) 全體部分原畫ノ大キサ
- (墨) 花鳥圖 絹本 着色 筆者 蔣廷錫 烏根縣那賀郡 守水彌惣次氏藏
- (空) 全體部分原畫ノ大キサ
- (空) 蔣廷錫 字ハ揚孫。西君ト號シ又々四谷。南沙ト號ス蔣伊ノ子。康熙癸未ノ進士。翰林ニ入り。官

大正 12 年 11 月 3 日 内交

發物廣告

西域古代藝術

(西歷三百年頃ノ佛敎藝術)

特價 金拾五圓

東洋美術總覽特別冊

(支那畫花鳥等)

特價 金八圓五拾錢

佛筆者 蔣廷錫 字ハ揚孫。西君ト號シ又々四谷。南沙ト號ス蔣伊ノ子。康熙癸未ノ進士。翰林ニ入り。官大學士ニ至ル。逸筆ヲ以テ寫生ス。花卉、品性南田ト号シ。或ハ奇。或ハ正。或ハ年。或ハ工。或ハ賦色。或ハ墨。一紙中恒ニ之レヲ間出ス而シテ自然ニ洽和シ。風神生動。意度常々。波石水口ニ點綴シ。超越ナラザル無シ。其至ル所ヲ擬スル。直チニ元入ノ席ヲ奪フ矣士大夫ノ筆意ヲ雅何スル者多ク奉シテ構構ト爲ス。進士ヲ成ス後。宮中極メラ其畫ヲ貴重ス世間ニ流傳スル者。眞跡絶メ少クナリ。性格雅ニシテ士ヲ愛ス凡ソ才藝觀ル可キ者ハ即チ門下ニ羅致シ指授シ以テ其材ヲ成ス。而シテ其畫遠ニ價本多キニ至ル。官ニ居リ兩朝特達ノ知ヲ受テ水利ヲ漕運シ繁盛ヲ際遇シ機務ヲ參贊シ國利民生ニ於テ均レク裨益有リ康熙己酉生レ雍正子奉ス年六十有四。文雅ト號シ。總覽ニ崇祀ス青桐軒秋風片雲譜集ヲ著ハス。

東洋美術博覧は此の第十二冊を以て一先づ終了します。これの籍子に臨んで、編者が這等の作品に對する概括的考察を著べて、讀者の批判、修正を俟たんと欲します。

跋

一畫面の完成に關して必要な條件は、畫的模式とその模式を作るに適應する技巧の些末なる點に到るまでも、その全局に於いて有機的に作用すべきことである。而して此の畫的模式とそれの有機的綜合とを伴するものは作家の人格である。以上を先づ私の這の敘述の前提とするのでありますが、私が茲に云つた「畫的模式」とい

東洋美術概観は此の第十二輯を以て一先づ終了します。これの終了に臨んで、編者が這等の作品に對する概括的考察を督べて、讀者の批判、教正を俟たんと欲します。

跋

一畫面の完成に關して必要な條件は、畫的様式とその様式を作る技巧の到来なる點に到るまでも、その全局に於いて有機的に作用すべきことである。而して此の畫的様式とそれの有機的綜合を律するものは作家の人格である。以上を先づ私の這の敘述の前提とするのであります。私が茲に云つた「畫的様式」といふ詞には注が必要だと思ひます。私が茲に用ゐる「畫的様式」といふ詞の意味は、一畫面を構成する部分的の様式のこと即ち線、形、及びそれ等から成る部分的の塊(マッセ)とそれ等の様式といふことでもあります。さて前述作家の人格に伴せられて、畫面に諧調を成す畫的様式の綜合の取態に因つて、その繪畫の品格が定まるのであります。此の繪畫の品格の理想的なるものが、東洋の繪畫に所謂氣韻であると思ひます。氣韻は古來東洋繪畫の上乗として尊ぶ所であることは昔々知られてゐることでもあります。而して東洋繪畫の其の作品に期待した所のものも亦た氣韻であります。一氣韻は南宗の獨占のやうに想はれてゐるけれども、私は支那畫を通じて、これを云つても差支ないと思ひます。然る氣韻は「必生知に在つて、固より巧密を以て得可からず。復た歲月を以ても到る可からず。默契、神會して然るを知らずして然るなり」と、宋の郭若虛は彼の有名な氣韻非師の論に於いて喝破してゐるのであります。ともも直さずそれは人格の流弊であるといふのであります。而して又た郭氏はそれは「天機より得て、靈府より出づ」とも謂つてゐます。これに依つて見れば氣韻は理想的であり、又主觀的であつて、これを成し遂げ能ふ所の人格者は「仁に依つて鸞、賦を擲り、深を窮る」軒窓の才賢呂穴の上士である。と稱してゐるのであります。現代の畫家諸氏がこれを肯定するか否かは此所では問題ではありませんが、宋元以來の畫家は其體傾向の如何に關せず、之を理想としたのであります。之を理想とすると同時に之を成し能ふ人格を内に成就することに努力したのであります。宋元以來の畫家の多くは、軒窓の才賢乃至、岩穴の上士を學んだ風があるのであります。彼等の賦を擲り、深を窮る所の對象は周易の玄理、老莊の奧義、佛氏の妙法等でありましたが、それは哲學者ならんが爲めてはなく、哲人的な完成を望んで居たのであります。而してそれは宋元以來、清朝に及ぶまで畫家の修養として缺くべからざること、せられてゐるのであります。然らば這の哲人的な人格とはどんなものか、それは其の人格者で無い限り、立言することは不可能であります。現代の言辭復興して之を云へば「超個人我の自覺」此の境地に到達することであり、支那畫論に「氣韻は遊心に本づく」とも云つてゐますが、この「遊心」とは個人的我を超越せる我の逍遙と解してよからうと思ひます。上述の如き修養を多かれ少なかれ種たる人格者の世界觀や人生觀が、繪畫の中に纏り込まれて東洋繪畫の各作の多くは出来てゐるのであります。故に此の點に意を用ゐて觀察しなければ東洋繪畫の眞價は充分に判然として來させぬ。只だ外觀は巧緻なる寫實である如く看らるゝものでも、之に親しむに隨つて、何處かその裡に塵界を超越した氣分を感じしめるものがあることを覺るのであります。茲に少しく注意を要することは、私は今、東洋繪畫の氣韻論を説いて、周易や老莊やを云つた爲に支那哲學の研究を勧めたやうに取られては困ること及び、繪畫が哲學的思想の表裏の方便であつたと述べたやうに誤解されても困ることでもあります。而して又作家の世に或るや人生觀が繪畫の中に纏り込まれてゐるといふのは、作家がわざ／＼然るをなしたといふのではあるまい。斯の人格に依つて律せられる其の創作には知らず識らずそれが纏り込まれてゐて、第三者にそれが見えたりするのであります。その故意にしたものは所謂氣韻としては見えないで、寓意の作として第三者には見えるのであります。尙ほ東洋繪畫には客觀的理想論、即ち精神の説があるのですが、それは氣韻論に對立するもので

さす。此の繪畫の品格の理想的なるものが、東洋の眞理に所謂氣韻であると思ひます。氣韻は古來東洋畫の上乗として尊ぶ所であることは告げ知られてゐることであります。而して東洋畫家の其の作
品に期待した所のも亦た氣韻であります。一氣韻は佛宗の観点の如くに想はれてゐるけれども、私は支那
畫を通じて、これを云つても差支ないと思ひます。然も氣韻は「必ず生知に在つて、固より巧密を以て得可
からず。復た歲月を以ても到る可からず。默養、神會して然るを知らずして然るなり」と宋の郭若虛は彼の有名
なる氣韻非師の論に於いて感發してゐるのであります。ともも直さずそれは人格の流露であるといふのであり
ます。而して又た郭氏はそれは「天機より得て、聲府より出づ」とも明つてゐます。これに依つて見れば氣韻は理
想的であり、又主觀的であつて、これを成し遂げ能ふ所の人格者は仁に依つて藝に遊び、深を窮る、深を窮る
軒窓の才實、岩穴の上士である。と稱してゐるのであります。現代の畫家諸氏がこれを肯定するか否かは此所では
問題ではありませぬが、宋元以來の畫家は其畫趣如何の如何に關せず、之を理想としたのであります。之を理想とす
ると同時に之を成し能ふ人格を内に成就することに努力したのであります。宋元以來の畫家の多くは、軒窓の才實
乃至、岩穴の上士を學んだ風があるのであります。彼等の隙を探り、深を窮る所の對象は周易の玄理、老莊の奧
義、佛氏の妙法等でありましたが、それは哲學者ならんが爲めてはなく、哲人的人格の完成を望んだ故であり
ます。而してそれは宋元以來、清朝に及ぶまで畫家の修養として缺くべからざることとせられてゐるのであります
。然らば這の哲人的人格とはどんなものか、それは其の人格者で無い限り、立言することは不可能でありませぬ
。現代的の言筈假りて之を云へば「超個人我の自覺」此の境地に到達することでありませぬ。支那畫論に「氣韻は
游心に本づく」とも云つてゐますが、この「游心」とは個人的我を超越せる我的逍遙と解してよからうと思ひま
す。上述の如き修養を多かれ少なかれ裡たる人格者の世界觀や人生觀が、繪畫の中に織り込まれて東洋畫の名作
の多くは出来てゐるのであります。故に此の點に意を用ひて觀察しなければ東洋繪畫の眞價は充分に判然として
來させぬ。只だ外觀は巧緻なる寫實である如く看らるゝものでも、之に親しむに隨つて、何處かその裡に塵界を
超越した氣分を感じしめるものがあることを覺るのであります。茲に少く注意を要することは、私は今、東洋
畫の氣韻論を説いて、周易や老莊や云つた爲に支那哲學の研究を勧めたやうに取られては困ること及び、繪畫
が哲學的思索の發表の方便であつたと述べたやうに誤解されても困るといふことであります。而して又作家の世
界觀や人生觀が繪畫の中に織り込まれてゐるといふのは、作家がわざ／＼然爲んとしたといふのではありませぬ
。斯の人格に依つて排せられる其の創作には知らず識らずそれが織り込まれてゐて、第三者にそれが見るとい
ふのであります。その故意にしたものは所謂氣韻としては見えないで、寓意の作として第三者には見えるのであ
りませぬ。尙ほ東洋畫には客觀的理想説、即ち佛神の説があるのですが、それは氣韻説に對立するもので
無いと、解せられます。

大正十二年九月

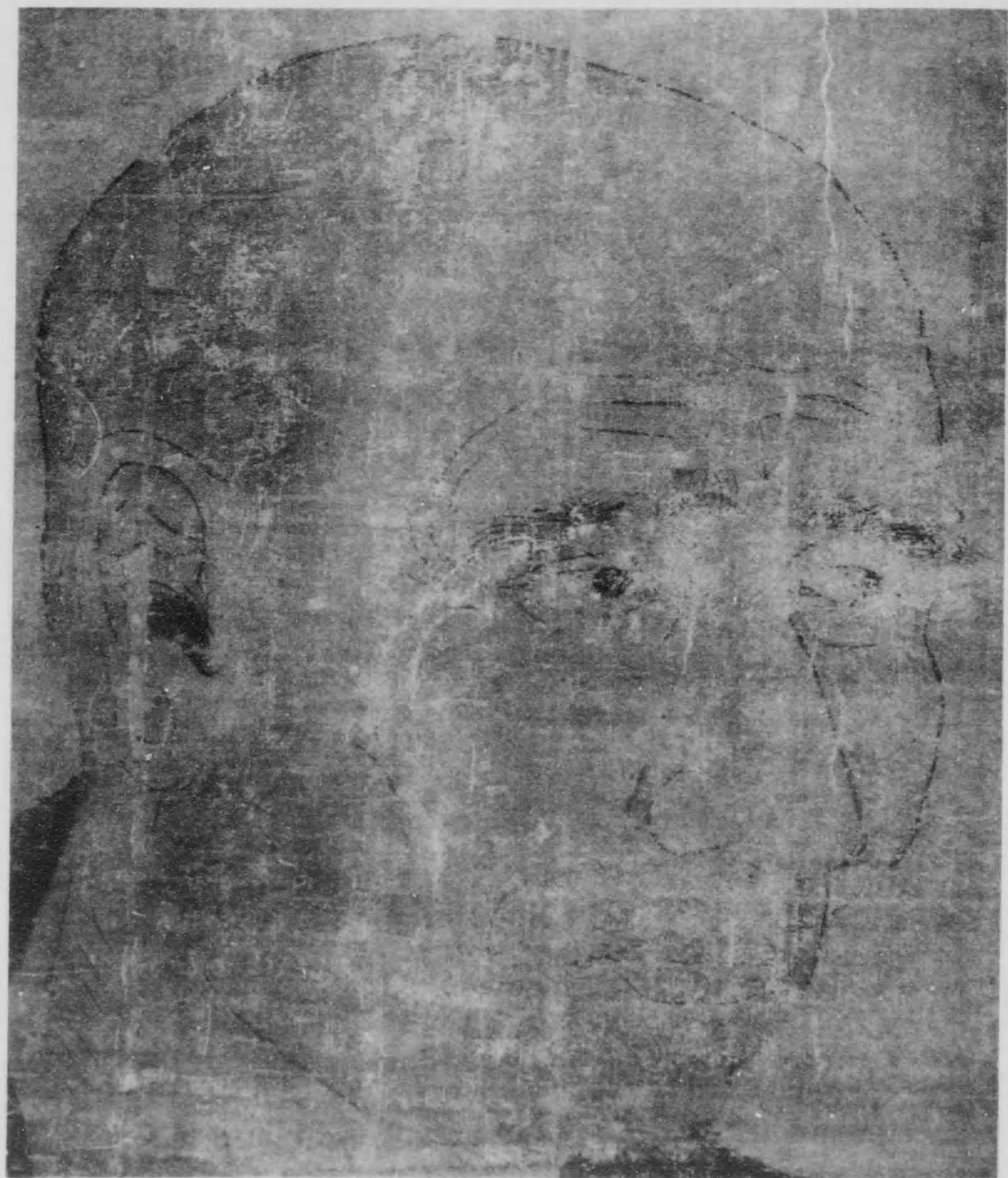
編者 識

近世の哲學界や藝術界に自然主義が跳梁して、理想主義の没落を見だしたのも昨日と去り、復た新理想主義の稱呼に
よつて、哲學界にはカントが復活して、藝術界も亦た同じ新理想主義の名の下に自然主義を棄却した諸種の作風
を見るやうな今日となつてゐます。近代の我が日本畫も多少遠うした風潮に隨伴して消長して來てゐると觀察し
て可いのであります。斯の時に際して東洋の理想主義の繪畫の遺作を紹介して、それに関する專員を陳述するこ
とは、おながも無益でも無いであらうと思ふのであります。









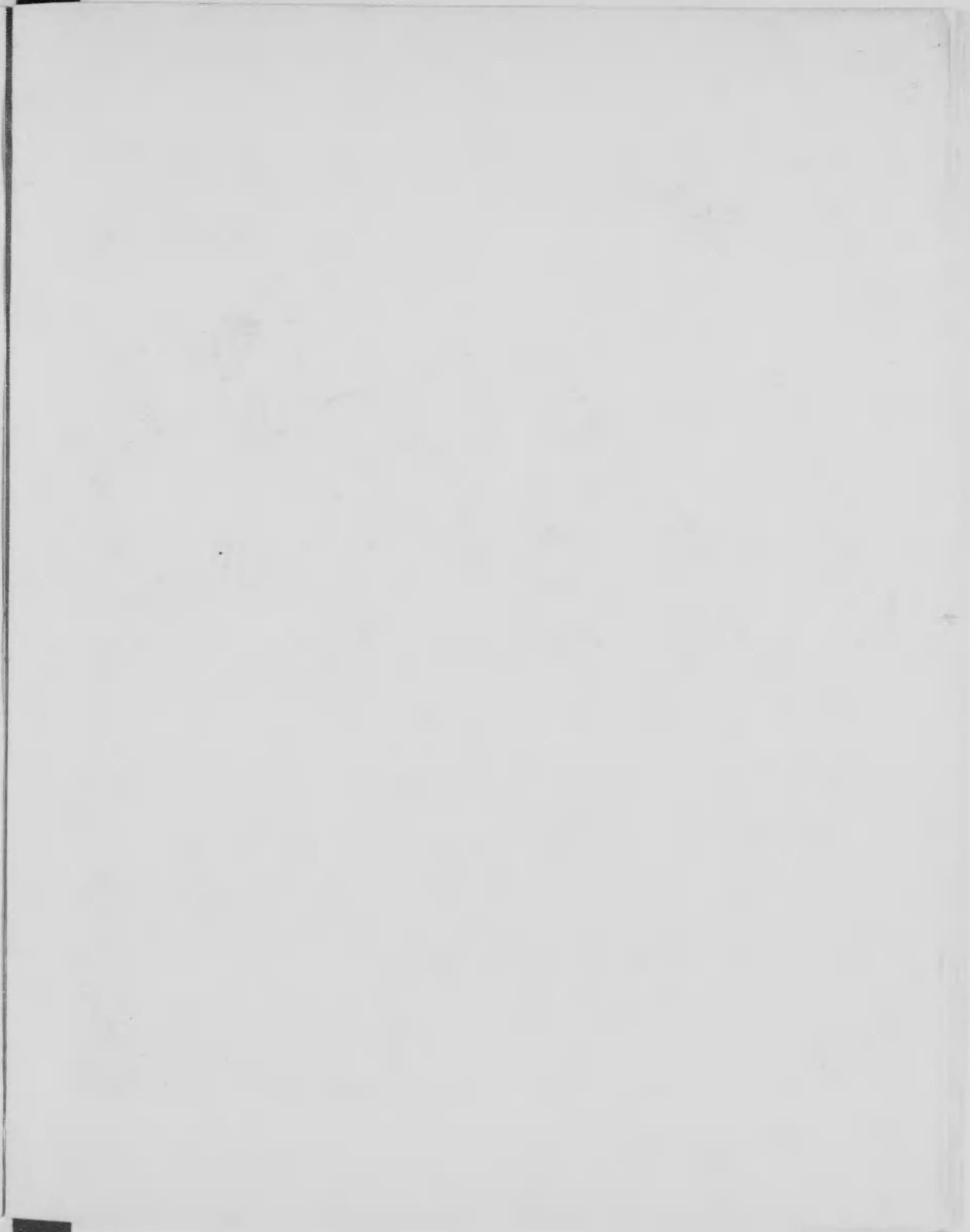


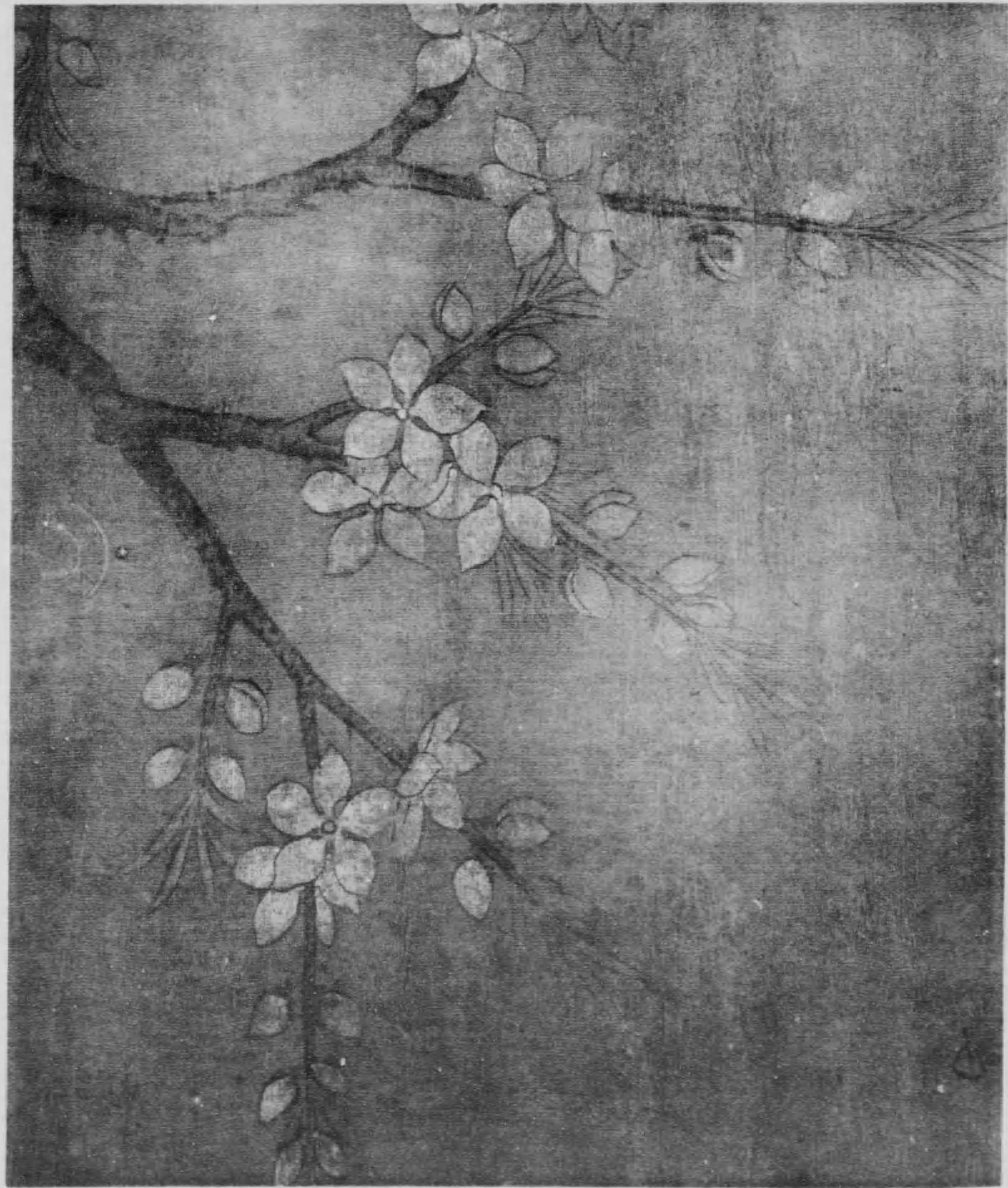












124-60

6

終